群教セ	G09-02
	平26.254集
	英語－中

「聞くこと」「話すこと」の能力を高める中学校英語科指導の工夫

――自分の考えを表現できるOral Interactionを通して――

特別研修員　角田　厚

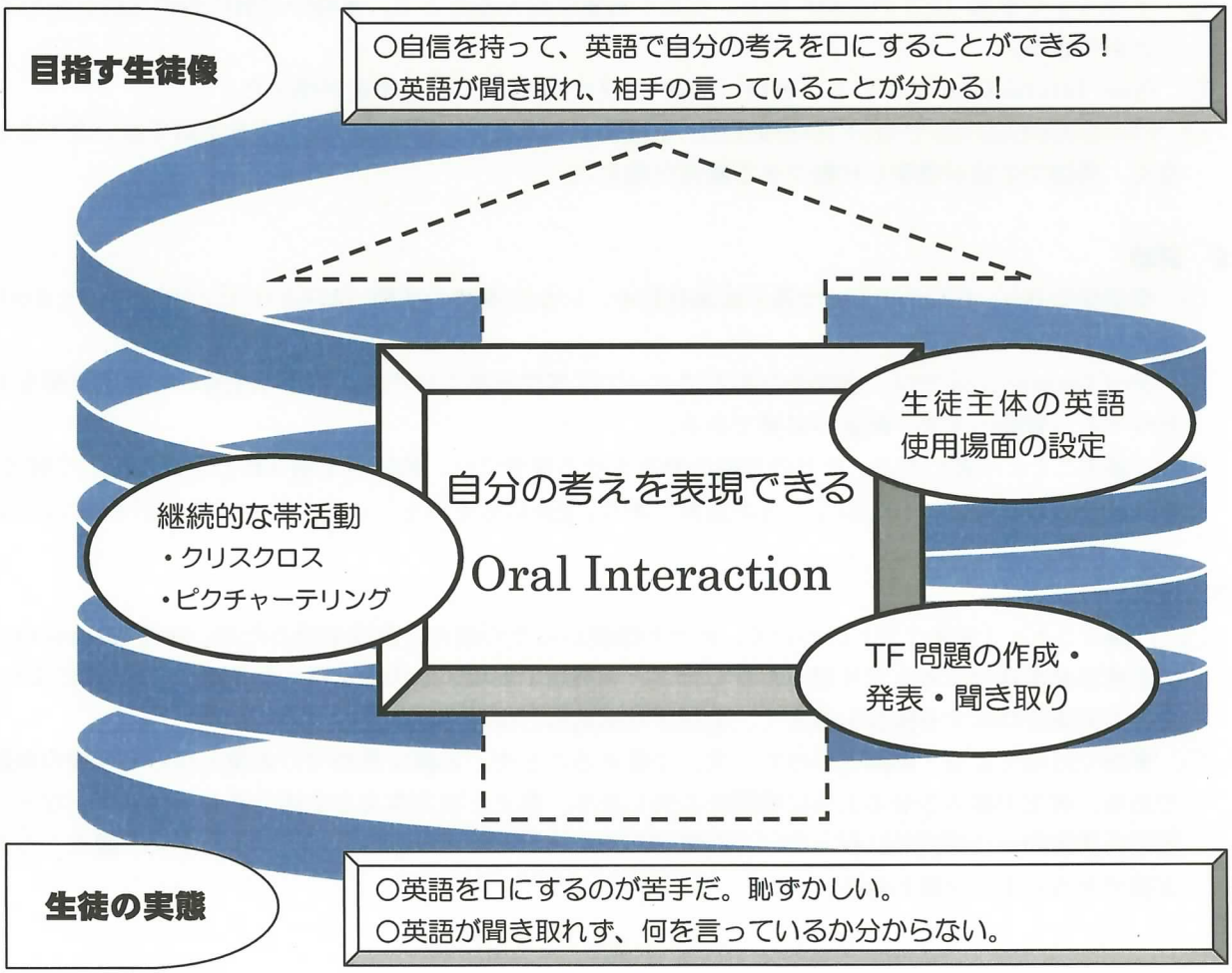
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

私たちが生活する社会は高度情報化・グローバル化し、様々な問題が起こっている。多くの国や民族が、主義主張を越えて、このような問題を解決しようとするとき、他の文化や言語に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度と実際に英語を通してコミュニケーションができる能力が必要となる。

「聞くこと」「話すこと」が、コミュニケーションの能力の基盤であることを考えると、依然として英会話を苦手とする日本人が多いのが現状である。本校の生徒においても、「英語を声に出すことが恥ずかしい」「英語を話すことは難しい」と感じている生徒が多く見られる。また、４月の全国標準学力検査（NRT）では「聞くこと」「話すこと」の数値が低くなっている。そこで、「聞くこと」「話すこと」の能力を育成し伸長させるために、Oral　Interaction を効果的に用いて、生徒が既習事項を使用する場面を増やすことにより、英語を「聞いたり話したりすること」に慣れ、英語をより身近に感じることができると考える。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



2　授業改善に向けた手立て

(1)継続的な帯活動

○　クリスクロス（口頭によるQ&A）

単元で扱う新言語材料や学習活動に必要であったり、スムーズにしたりする既習事項を口頭によるQ&Aで扱うことで、基礎基本の定着や生徒の発話の機会を増やす。初めは教師対生徒での活動を、生徒対生徒に発展させる。

○　イラストや写真を用いての表現活動

既習の文法事項を使って、イラストや写真を英語で表現させる。扱う文法事項を変えることで、同じイラストや写真でも、多様な表現ができることを実感させる。

(2)Classroom English と Oral Interaction

本時のメインとなる学習活動の導入時には、Oral Interaction で生徒と英語でやりとりを行いながら、興味や関心を持たせていく。授業中の簡単な指示や、声かけ、賞賛など教師が継続して英語を使うことで、自然と英語を聞くことに慣れさせる。

(3)TF 問題の作成と発表、聞き取り、自分の意見や考えの表現

教科書本文の内容理解を確認させて更に深めさせるために、生徒自身にTF問題を作成させて，自作の問題を聞き手を意識させて発表させる。他の生徒は、その英文を聞き取ってその正誤に解答する。さらに本文の内容に対する自分の意見や考えを表現させた。

Ⅲ　研究のまとめ

1　成果

○　継続的な帯活動によって、生徒が自分で考えた英語を口にする機会が増えたことで、英語学習への意欲の高まりが見られた。

○　イラストや写真（ICTの活用）なと、生徒の視覚に訴えることで、本時の学習内容の理解が高めることができた。

○　Oral Interaction において、英語（単語も含む）で答えられる生徒が増えた。

○　Classroom English や Oral Interaction を継続することで、授業時の指示を日本語で言い直すことなく、英語で生徒が理解し行動できる場面が増えた。

2　課題

○　帯活動や Oral Interaction で扱う言語材料を、いかに本時の活動（ねらい）につなげていくかが、大きなポイントである。

○　Oral Interaction では、意図的な指名によって平等性を持たせたり、苦手な生徒への個別支援をしたりする（質問の工夫）配意が必要である。

○　「話すこと」「書くこと」などの表現活動をさせる場合には、教師が予測される生徒の反応や解答、また評価規準を明確にしておくことが重要であり、生徒にもそれをしっかりと示すことが大切である。

3　提言

○　「聞くこと」「話すこと」について、日々の授業からその能力の育成を図るため、Oral interaction で生徒自身が自分で考えたり思ったりしたことを英語で表現する活動を行った。継続的な活動により、生徒が英語を口にする機会も増えて、発話する抵抗感も軽減された。

○　単語ではなく主語・動詞をつけた「文」で答えることや、正確な英語での表現となると今後の課題である。英文で答えさせるように発問を工夫したり、答えとなる英文を全体で共有したりするなど、質問を意図的かつ継続的に行っていく必要がある。また、相手を意識して「話す」という観点からも支援できるとよいと思われる。

＜授業実践＞

実践１

１　単元名　「PROGRAM　３　Charity　Walk」（第２学年・１学期）

２　本単元及び本時について

本単元では、ハワイ・マウイ島の義援金を集めるチャリティー・ウォークやカナダでのウォーク・ザ・ワールドの話題が中心的な内容となっている。生徒にとって、身近なチャリティー活動といえば、赤い羽根募金や24時間テレビ、また本校で実際に行っているペットボトルのキャップ集めなどがあげられる。そうした自分たちの実際に行っている活動の意義について再度確認させ、このような活動が日本でも海外でも広く行われていることを知り、規模は小さくても自分たちも社会に貢献することができることを感じ取らせたい。本時では、帯活動として本単元の言語材料であるmust(must not)を使ったクリスクロス、本時の学習活動につなげるためのチャリティーに関するOral Interactionを行った。また教科書本文の正確な内容理解を図るために教師が作成したTF問題に取り組ませる実践を行った。

本時の学習課題（ねらい）
○ピクチャーカードを見て、英語で表現する。（帯活動）
○教科書の英文を読み、ハワイ・マウイ島でのCharity Walkについて理解し質問に答えることができる。

３　授業の実際

(1)帯活動１

①＜ねらい＞新出言語材料の定着と「話す」能力を高める。

②＜活動内容＞禁止のピクチャーカードを見せて、must　not を使って英文で表現をするクリスクロスを行った。既習事項であるため、ほとんどの生徒が積極的に挙手し、自信を持って答える姿が見られた。また、さらなる定着を図るために全体でリピートさせながら活動させることで、全員が集中して参加することができた（図１）。

○使用したピクチャーカード（例）

T　：What can you say about this picture?
S1：You must not eat here.
T　：How about the next picture?
S2：You mustn't sleep…

図１　教師と生徒の会話例

(2)帯活動２

①＜ねらい＞教科書本文の内容への興味・関心を高めるとともに「聞く」「話す」能力を高める。

②＜活動内容＞本時の学習内容であるハワイやチャリティーに関するピクチャーカードを見せながら、教師の英語による説明を聞いたり質問に英語で答えたりした。意図的な指名を入れながら、生徒が考えたことを自由に発言させた。単語での解答が多く、英文で言い直させる場面が多くみられたが、教師の英語による質問については、よく理解している様子であった（次頁図２・３）。

T ：What kind of fruits do you like?
S1：I like apples.
T ：Oh, I see. Then.
　　What is this fruit ?
S2：It's a pineapple.
T ：That's right!
　　Look at the next picture.
　　What are they doing ?
S3：Dance!
T ：OK! They are dancing.
　　Repeat after me…

図２　　イラストを用いた生徒とのやりとり

T ：This is a 24 HOUR
　　TELEVISION's mark.
T ： Do you know this mark? Who knows this?
　　Raise your hand.
S ：(Raising their hands.)
T ：OK! Did you watch 24 HOUR
　　TELEVISION on TV?
S1：Yes, I did. I saw it….

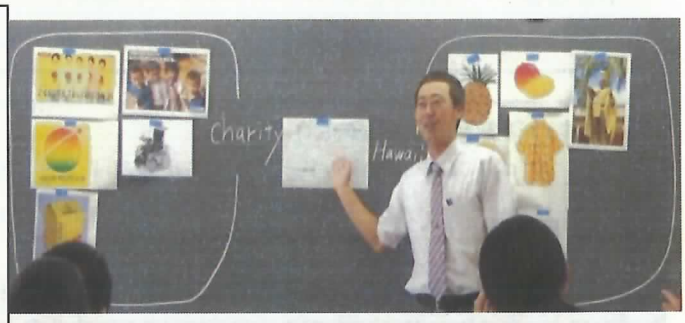
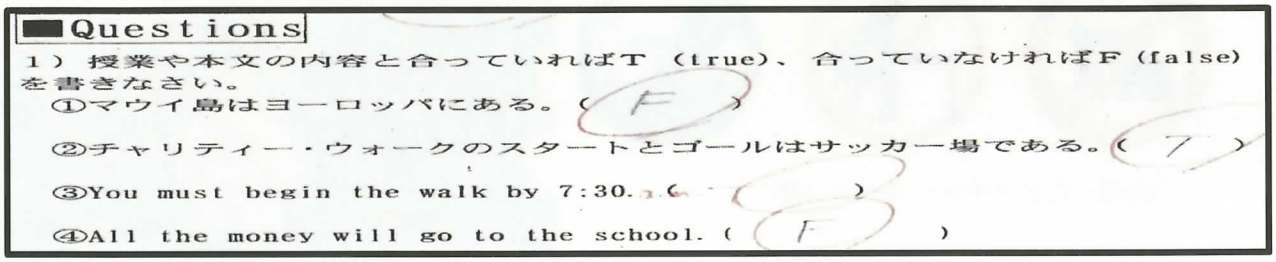


図３　　本文の内容理解につなげる会話例

(3) 本文の内容理解

①＜ねらい＞教科書の英文を読み、ハワイのマウイでの Charity Walk について理解し質問に答える。

②＜活動内容＞文法的、内容的にポイントを絞った日本語訳のワークシートで本文の意味を書かせ、さらに教師が作成した TF 問題に答えさせることで、正確に理解できているかを確認させた。生徒たちは、Oral Interaction による導入によって、本文の場面や状況を大まかに把握できていたので、スムーズな学習活動を行うことができた（図４）。



Questions

1） 授業や本文の内容と合っていればT (true)、合っていなければF (false) を書きなさい。

①マウイ島はヨーロッパにある。（ F ）

②チャリティー・ウォークのスタートとゴールはサッカー場である。（ T ）

③You must begin the walk by 7:30. （　　）

④All the money will go to the school. （ F ）

図４　　生徒のワークシート

４　考察

帯活動１では、既習事項ということもあり、ほとんどの生徒がイラストを見て、スムーズに英文を口にすることができた。クリスクロスのゲーム性もあり全員が意欲的に取り組むことができた。また、扱った英文を必ず全体でリピートさせたことで、全員が集中して行うことができ、授業のテンポも良くなった。

帯活動２では、自分から挙手して解答できる生徒は少ないが、指名したり質問を工夫したりすることにより解答することができた。間違いを恐れず英語を口にする雰囲気や質問の難易度、英語での教師のヒントやアドバイスが大切である。特に単語レベルで解答する生徒も多いため、文で答えさせるための質問文を工夫したり、時間をとって英文で言わせたりするなど、徐々にレベルアップさせていきたい。

本時の学習内容に関するイラストを提示し、Oral Interaction で導入したことにより、教科書の内容理解がスムーズに行うことができた。ほぼ全員の生徒が TF 問題に正答することができた。

実践２

１　単元名　「PROGRAM　7　If You Wish to See a Change」（第２学年・２学期）

２　本単元及び本時について

本単元では1992年、ブラジルのリオデジャネイロ（ブラジル）で開催された「地球環境サミット」で「伝説のスピーチ」を行ったセヴァン・カリス＝スズキさんが題材である。伝説のスピーチ以後の彼女の成長を追いながら、環境破壊をはじめとするいろいろな問題を解決し「世の中の変化を見たいなら、まず自分が変わらなければならない」というガンジーの言葉に共感し、行動を起こす必要性を説いている。生徒はセヴァンさんの経験や考え方に触れ、自分の身近な生活を振り返ることで世界中の人々や物資がつながっていることを再認識することができる。さらにセヴァンやカンジーの生き方にも触れることでグローバル社会での自分の将来の生き方を考えることができる。そのために本時では、自分の意見や考えを英文で書かせることを、単元の最終的なねらいとした。また、継続的な帯活動としては本単元の新言語材料である「look＋形容詞」の復習を、ICTを活用して実践した。

本時の学習課題（ねらい）
○本文の内容に関するTF問題を作ろう。
○セヴァンの意見に対する自分の意見を書こう。

３　授業の実際

(1) 生徒によるGreeting

＜ねらい＞毎時間必ず行うGreetingを生徒が主体的に進めることで、生徒が人前で英語を「話す」機会を増やし慣れさせるとともに、話し手を意識する場を設定した（図５）。

S1：Hello, everyone!
S　：Hello, Mr. Nakajima.
S1：How are you?
S　：Fine. /I'm OK./ So so....
S1：How's the weather?
S　：It's cloudy.

図５　生徒同士のあいさつでスタート

(2) 帯活動１

①＜ねらい＞新出言語材料の定着と「話す」能力を高める。
②＜活動内容＞電子黒板でイラストを提示し、本単元で学習した「look＋形容詞」を使って英文で表現する活動をクリスクロスで行った。視覚的に示すことで、生徒の具体的な表現力を高めるとともにICTの活用によりテンポよく復習することができた。また一文ずつ全員がリピートし、何度も口頭練習させて定着を図った（図６）。

T　：What do you think about the picture?
S1：He looks nervous.
T　：Right! Please choose the direction.
S1：Back!
T　：How about this picture?
S2：It looks pretty...

図６　ICTを活用した活動例

(3) 帯活動２

①＜ねらい＞本時の学習内容への興味・関心を高めるとともに「聞く」「話す」能力を高める。

②＜活動内容＞電子黒板による写真の提示や身近な文房具を例に挙げて、英語でやりとりをしながら、前時までの学習内容を確認し、本時の学習にスムーズに取り組めるよう工夫した。Yes / No だけや単語だけの解答もあったが英文で教師の質問に答えられる生徒の姿も見られた（図７）。

T：Who is she?
S：She is Severn.
T：Where is she from?
　Is she from America? England?
S：She is from Canada.
T：That's right!
　She made a speech at the Earth Summit.
T：So. How old was she?
S：She was twelve years old.
T：Yes. When she made a speech,
　she was twelve and ...

図７　教科書の主人公の写真と会話例

(4) TF 問題の作成と自分の意見を英文で表現する

①＜ねらい＞「書くこと」「話すこと」「聞くこと」の能力を高める。

②＜活動内容＞生徒自身が、本文の内容に関する TF 問題を作成する「書く」活動を取り入れ、また生徒同士が質問し解答することで、「聞く」「話す」活動を取り入れることで内容の理解を深めさせるとともに、トータル的な表現の能力の育成を図った。さらに教師が作成した TF 問題に自分の意見を加えて書かせた。個人で作成した後にグループで共有させたことで、苦手な生徒も学びあいができ、TF 問題の作成をすることができていた。生徒が質問し、生徒が答えるという生徒主体の学習活動を行うことができた（図８）。

○作成の手順

個人 ⇨ グループで共有 ➡ グループで発表準備・発表 ⇨ 聞き取り

＜書くこと＞　＜話すこと＞　＜聞くこと＞

S1：The Earth Summit was a small event.
S2：Severn had many opportunities to meet and talk.
S3：When people in Japan wear clothes, they don't have to think of China.
S4：She became a teacher.
S5：Severn sometimes says "People in one country can't live forever without the help of people in other countries."

図８　生徒の作成した TF 問題の例

４　考察

生徒の表現の能力を育成するために、継続しているあいさつや帯活動、Oral　Interaction、本時では TF 問題の発表と、主体的な取り組みを意図的に多く取り入れた。その結果、授業の雰囲気や生徒が英語を口にすることへの抵抗が軽減されてきている。また、Oral　Interaction での教師の質問に、英語で答えることができる生徒の数も増えてきていることが成果として挙げられる。

帯活動については、扱う言語材料の精選が大切である。本時の学習内容にいかに関連性を持たせて、生徒がスムーズに学習に取り組むことができるかがポイントである。